

# 令和元(2019)年度水稻生育診断予測事業速報 No. 6

## (普通植栽培 8月2日調査結果)

令和元(2019)年 8月 5日  
栃木県農政部経営技術課

- ◎ 普通植の生育は平年並の出穂が予想される。
- ◎ 普通植「あさひの夢」は8月7日頃が追肥適期。
- ◎ 早植は出穂期～穂揃期。高温障害を防ぐ水管理と適期収穫に向けた早めの準備を。
- ◎ 早植の収穫は平年並～やや早まる見込み。本年は特に籾割れが発生しやすいので、刈り遅れに注意が必要。帯緑色籾率10%での収穫開始の徹底を。
- ◎ イネ縞葉枯病が発生している。再生稲は感染源になるので、収穫後は速やかな耕起を。

### 1 気象概況

#### 【7月下旬～調査日（宇都宮）】

7月下旬の平均気温は平年より高く（1.3℃）、日照時間は平年比90%と少なかった。特に、梅雨明け前（7/28まで）は少なかった。降水量は7月28日37mm、31日14.5mm、8月1日55mmのまとまった降雨があり期間内は平年比165%であった。

7月29日の梅雨明け後から8月1日までの平均気温は平年より高く（2.9℃）、日照時間は平年比160%と多かった。降水量は69.5mmと多かった（平年22.4mm）。

### 2 調査結果

#### （1）普通植栽培（あさひの夢）〔詳細：別添表1、図1〕

- ① 草丈は77.7cmで平年比100%と平年並、茎数は433本/m<sup>2</sup>でやや少ない(98%)である。
- ② 葉齢は11.3で平年より0.9葉少なく、葉色は4.2で平年である。
- ③ 葉色×茎数値は1,827で平年比99%と平年並である。
- ④ 幼穂長は0.14cmで平年より0.04cm短い。幼穂長から予測すると出穂期は8月26日で平年並の予想である（平年出穂期：8月26日）。
- ⑤ 葉いもちが4か所で確認されているが、発生程度は低い。

### 3 技術対策

#### （1）普通植栽培

##### ① 穂肥

穂肥時期は出穂18～20日前、施肥窒素量は10a当たり2～3kg（BBNK-202号、

窒素量の50%は緩効性)を基準とするが、生育診断値(葉色×茎数値)が指標値を上回る場合は遅らせるか減肥し、下回る場合は早めに施用するか増肥する(下表)。

幼穂長と葉齢から推定すると、穂肥適期は8月6日～8日を中心とした第2半旬とえられる。必ず幼穂長によりほ場ごとの出穂前日数を把握し、穂肥の施用時期を決定する。

表1 普通植「あさひの夢」の生育診断指標値(栽植密度22株/㎡)

時期	葉色	茎数(本/㎡)	草丈×茎数
最高分げつ期	4.6～4.9	530～550	2,400～2,800
出穂期	3.8～4.2	440～470	1,700～1,900

## ② 水管理

現在は幼穂形成期頃であり、定期的な間断かん水を継続し、根の活力を維持する。

## ③ 病虫害の防除

### ア 斑点米カメムシ類

農業環境指導センター発表(令和元(2019)年7月19日)の「令和元(2019)年度病虫害発生予報第4号」によると、今後の発生予想は「平年並」である。

斑点米カメムシ類は、イネ科雑草等の穂に誘引され飛来するので、本田内の除草や水田周辺の草刈り(水稻の出穂2～3週間前と出穂期頃の2回)を行ってカメムシ類の発生しにくい環境を整えることが重要である(下図参照)。さらに、穂揃期に斑点米カメムシ類が水田内に確認できる場合は薬剤防除を行う。

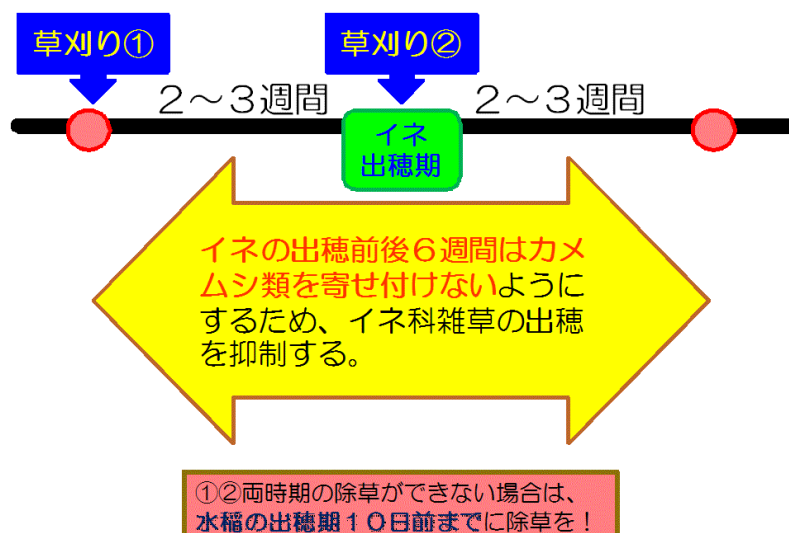


図1 畦畔2回連続刈りのイメージ

なお、薬剤散布に当たっては、養蜂家へ事前周知するとともに、ミツバチの活動が盛んな時間帯(午前8時から12時)を避け、飛散しにくい粒剤等の使用に努める。

### イ いもち病(葉いもち)

梅雨入り後ぐずついた天候が続いており、葉いもちの発生ほ場率は42.3%(平年比の216%)となっている(植物防疫ニュースNo5)。ほ場の発生状況をよく

観察し、発病を確認したら直ちに登録のある農薬で防除する。特に、中山間地域の常発地などでは防除を徹底する。

穂いもちの防除は、穂ばらみ期（出穂前7日頃～前日）と穂揃い期の2回防除を行う。

「令和元(2019)年度 病虫害発生予報第4号」（令和元(2019)年7月19日 農業環境指導センター）」によると、発生予想は量「やや多い」となっている。高温が続くといもち病は発生しにくくなるが、本年は、穂いもちの発生ほ場が多いため、穂いもちの発生につながりやすいので、生育状況をよく観察し、早期発見・適期防除に努める。

## ウ 紋枯病

発生を確認した場合は穂ばらみ期～出穂期に防除を行う。発生程度が高い場合、玄米の登熟・品質が低下することから、昨年発病が多かったほ場では必ず防除を行う。

## エ 害虫

農業環境指導センターが発表する発生予察情報等に留意し、適切な防除を行う。

## (2) 早植栽培（コシヒカリ）

### ① 水管理

現在、出穂期～穂揃期となっている。登熟期間は水を必要とする時期なので、水が不足しないよう、こまめな間断かん水を行う。

令和元(2019)年8月1日気象庁地球環境・海洋部発表の「関東甲信地方1か月予報」では、平年に比べ晴れの日が多く、向こう1か月の平均気温は高い確率が60%と予想されている。出穂期から登熟期（特に登熟初中期）にかけての異常高温は、稲体を衰弱させ、乳白等の白未熟粒や胴割粒の発生を助長し、また、7月が日照不足で経過しており、出穂後20日以降に高温になると割れ粳が発生する確率が高まるので、夕方から夜間のかん水により地温を低下させて、根の活力維持に努める。

なお、高温時の常時湛水管理は高水温により根腐れが起きやすくなるので、水温に注意する。

さらに、高温のほか、風などによる急激な湿度低下なども白未熟粒・胴割粒の発生原因となることから、気象条件には十分注意し、適切な水管理を行う。特に、台風襲来時の強風や、通過後の乾燥した強風（フェーン）が予想される場合はやや深水とし、脱水による青枯症や白未熟粒の発生を防止する。

#### 【胴割粒が発生しやすい基準温度】

◇ 出穂後10日間の最高気温の平均：30℃以上

#### 【白未熟粒（乳白等）が発生しやすい基準温度】

◇ 出穂後20日間の最高気温の平均：32℃以上

◇ " 平均気温の平均：27℃以上

◇ " 最低気温の平均：23℃以上

## ② 適期収穫

早植コシヒカリの出穂期は平年並となっている。今後の気温は高く推移することが予想されることから、成熟期はやや早まると考えられる。県南部が8月第6半旬から、県中部が9月第2～3半旬、県北部が9月第4半旬が収穫開始と予想される。

登熟期間が高温で推移すると、葉や枝梗は緑色でも籾は刈取り適期を迎えている場合がある。刈り遅れを防ぐため、出穂後1か月を過ぎたら帯緑色籾率（不稔を除いた全籾に対する緑色籾の比率）を確認し、10%になったら収穫を開始しできるよう、機械整備等の事前準備をしておく。また、刈取り時期の籾水分は25%以下になったら刈取りを始める。

出穂期後の登熟前半の高温の影響は特に県南部で懸念されるため、刈り遅れによる品質低下を防止するために帯緑色籾率の確認と、早めの収穫の準備が必要である。

## ③ 病害虫の防除

### ア イネ縞葉枯病

現在、県中南部の早植栽培で発生が多く確認されている。

収穫後、イネ縞葉枯ウイルスに感染した株から伸びてきた再生稲（ひこばえ）を放置すると、ヒメトビウンカの個体数増加、保毒虫率の上昇を助長する。収穫後は、速やかに耕起して発病株をすき込むとともに、次年産では「とちぎの星」等の抵抗性品種の作付を増やす。

### イ 斑点米カメムシ類

穂揃期に水田内で斑点米カメムシ類が確認できる場合は、薬剤防除を行う。常発地では第1回目防除から7～10日後の追加防除を行う。

### ウ いもち病（穂いもち）

葉いもちの発生が見られ、その後降雨が続き、多発のおそれがある場合は、出穂始めから穂揃い期の防除に加えて、穂揃い期後7～10日後の追加散布を行う。

※ 薬剤（登録農薬）はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>)

**7月～8月は「農作業中の熱中症による死亡事故」が集中します。**

夏の農作業で、以下のことに気をつけましょう。

- 日中の気温の高い時間帯の作業は控えましょう。
- こまめな休息、水分補給を行いましょ。
- 体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断しましょ。

